

紹介

維新史

文部省維新史料編纂事務局編

如何なる歴史事實も其が單に過去に存在したと言ふだけでは我々の今日の問題とはなり得ないであらう。即ち過去は現在に生きてあり、我々の實踐を通じて其の中に働き來る限りに於てのみ眞に過去となり得るであらう。維新に成立した生活の様式は確に我々の中に生きて居り、我々の行動を今尙規定して居る。此の事がなければ維新は決して切實に顧みられる事がないと言へる。然し今や我々の生活は維新以來の其を越えて、之を一の歴史的様式とする點に迄近付きつゝあり、此處に新に形成されつゝある生活の仕組と古きものとの對決が日々我々の身の周りに於て、吾我々の内部に於てすら劇しく闘はれてゐる。此の、さしせまつた體驗は我々をしてより、必然に維新を回顧せしめるであらう。そして今こそ今日我々に排除せる現在への親切なる同情と理解、將來への行動の正しき理論と情熱、とを與へる所の維新史が成立し得るであらうし、又成立すべきである。かゝる際に於ける此の維新史の出版は確に時宜を得たものと言へるであらう。

本書は明治四十四年維新史料編纂事務局開設以來二十七年間に

蒐集整理せられた『大日本維新史料』四百餘冊の稿本を基とし、「筆を孝明天皇踐祚の弘化三年二月に起し、廢藩置縣の行はれた明治四年七月に至る二十五年七箇月の事を叙するを以て目的とし」主として國內政局の推移を叙し併せて外交・學事・軍事・經濟等諸般の説明に及び、「合計七冊大略四千頁（内一冊は年表・系譜・諸藩一覽表・重臣補任表に充てる）」に編纂され、毎年一冊宛刊行さるゝ事となつてゐる。而して現在既刊の第一冊は「尊王論の顛末を没却しては明治維新の由來は説き難く（第一編）尊王論を説くには勢ひ朝幕の關係（第一編第一章）と學問の發達（第一編第二章）」と言及せざるを得ない。又同時に封建制度の衰頽（第二編）と海外勢力の東漸（第三編）も無視する事が許されぬ」として三編七章七百頁に亘つて整然と「委曲を記述して」ゐる。如是が本書及其の第一卷の體裁である。

扨て我々が次で述ぶべき批評は、現在手にし得る第一卷のみを以て未だ見ざる全卷を推しての事であつて、甚だ臆測の至であるが全體を見ずして部分を説くは猶更不可能に近い。故に此の度は唯第一卷の説く所と、凡例、緒言の宜ふる處とを以て全七卷を一貫する維新史解釋の仕方を臆測批評するに止め度いと思ふのである。誠に本書の説く如く、我朝は萬世一系の聖天子上に坐まし、「天皇親政の宏議」は「天壤と壤まり無く」時に顯晦あり」と雖も國民の心に潜在する建國の精神が忽ち光を放つて、「上古は即ち大化の改新、中頃にしては建武の中興、近時にあつては明治の維新」と三たび「大なる復古的顯現を見、」就中明治維新の業最も

